

高村光太郎の書

及川 厚

Atsushi OIKAWA

《序》

北川太一^{注1}氏の「光太郎書の根底は、父光雲をめぐる家の美意識に胚胎する」(北川太一『高村光太郎ノート』文治堂書店 平3・3所収)という言葉は、高村の生涯を貫く言葉であると思う。

高村はその一生を通して、書と歩んできた。詩人・絵画・彫刻家として、または彫刻・絵画の評論家として、様々な道を歩んできたが、その後ろには常に書の影が付き添っているのである。それが、突如として、岩手での山居生活を含めた晩年に表面化し、「書」作品が爆発するように書かれることになる。その数は、数百点に及ぶ。何が高村をそうさせたのだろうか。

高村にまで連なる家系の中で、文学的な教養を持つ人物が一人い

る。高村の祖母「すぎ」である。

書は自ら手本を書く位で御家流の見事な筆跡だった。今もそれは残っている。私の母の話では加賀様の御祐筆を勤めていたという事である。

高村豊周^{注3}「家系のこと」(『高村光太郎全集』第一巻月報1 昭32・3所収)からの引用であるが、この高村の祖母にあたる「すぎ」は上手に和歌も詠んでいたということである。「すぎ」は高村家の中でも重要な存在であった。

高村の家系の中で、彫刻家になったのは、中島の家から養子に行った光雲^{注4}、つまり、高村の父からで、それまでは単に手先が器用な程度の家系であつたらしい。それが、埼玉^{注5}県幸手町の東大寺の出である「すぎ」の相当の教育を受けた血が合わさると、帝室技芸員、東京美術学校教授、多くの弟子たちに囲まれた生活と、光雲は明治の時代を代表する彫刻家となる。しかし、そのような父親は、高村の目にはどのように映っていたのか。

高村の留学^{注6}後の父との確執は、因襲に捉われた日本、日本人の具体的な存在としての父と西欧で得た芸術家としての高村の対立と捉えられがちだ。しかし、本当は、高村自身の中の血の葛藤ではないだろうか。そして、そのように考えるならば、「すぎ」の血は、どのようにして光雲を、明治を代表する職人気質の彫刻家として誕生させ、その直系にあたる高村を詩・彫刻・絵画と様々な分野におい

て輝きを見せた芸術家としたのか。このことは、この後の第一章にその考察を述べたいと思う。

次に、日本の彫刻界における不満、その代表である父光雲との気持ちの通じあえない時期が、高村の晩年における書の基礎となった、と私は見ている。留学後の文学の著しい変化と時期を同じくしているのは興味のあるところだが、口語自由詩などと考え合わせる、高村は常に因襲の常識を打ち破ろうとしていたようなところがうかがえる。人の目を引くような奇抜なことや自分の特質だけを全面的に出していくといったことではなく、常に物事の本質に帰ろうとする態度が高村にはあった。また、高村には本質を鋭く見抜くところもあった。どのようにして高村はそのような態度や洞察力を身につけたのだろうか。

高村は自ら彫刻家と称したことは周知のことであるが、彫刻家の家に生まれた彼が、わざわざそのような事を言わずとも良いような気がする。それは、あまりにも世間が自分のことを詩人と称することを嫌がったためだろうか。「自分と詩との関係」で「詩は彫刻の安全弁」「彫刻を純粹にするため」と語った。それなのに、晩年、彫刻はやらす書をやるのはどうしたわけか。高村にとって彫刻とは何だったのかと考えさせられる。

彫刻家を称し、純粹な彫刻を作った彼は、晩年、山居生活の後「十和田湖の裸婦像」の制作にかかる。長いブランクの後のこの作品は高村の数少ない彫刻作品の中で酷評される的となる。つまり、晩年の彼に彫刻は無理であったという見方が大半で、そのため

晩年の高村の書は彫刻の代わりとする見方が一般的だ。しかし、彫刻のことは分らないが、少なくとも「書」を見る限り、いい加減なものなどないと私は見ている。これだけのものが書ける高村が、晩年に作った「十和田湖の裸婦像」が不評なのはいいだろうか。理由であるのだろうか。何をやるにも何か言わずにはおれない、そのような内から湧き出るような状態になってこそいい芸術が出来ると信じていた高村であるのに、やはり長いブランクと高齢という条件の中では如何ともし難かったのだろうか。この考察は「十和田湖の裸婦像」を中心に第二章で述べたい。

高村の晩年の書が、高村の芸術の中で一番重要であると私が考える。そこで、第三、四章では直接に高村の「書」について言及したい。高村は死ぬ何日前に、しきりに書の展覧会を望んでいたことを、自分の日記に書き残していたり、友人に語ったりしている。彫刻家を自称し、世間では詩人として認められていた彼がなぜ、死の直前にそのどちらも口にすることがなく、書の展覧会の事が想起されたのだろうか。実はこの時期、そればかりではなく、とても起き上がる状態ではないのに、書を書きたがっていたことも分かっている。

以上のように、家系のこと、彫刻のことなどをそれぞれに考え、高村の書がそれらの様々な問題とどのように関わり、命生命のことでどう重なるのかを合わせて考えたい。また、それにより高村が何を根本に置き、その先に何を見ていたのかを考えてみたいと思う。

注1 高村光太郎研究家。高村光太郎一筋に研究を続け、『高村光太郎全集』の編纂に当たっている。

注2 高村の書は、『高村光太郎書』（一九五九年七月十日初版発行 二玄社）・『新潮日本文学アルバム8 高村光太郎』（一九八四年六月二十日発行 新潮社）・『墨』八号（一九七七年九月一日発行 芸術新聞社）・『墨』五十三号（一九八五年三月一日発行 芸術新聞社）などで確認できる。その中で、晩年の秀逸なもの多くは、『高村光太郎書』によって五十六点が確認できる。また、高村の書は個人蔵のものが多いが、花巻にある高村記念館の高村と智恵子の遺品、彫刻、紙絵、資料など百数十点に及ぶものの中にも書が何点か確認できる。

注3 光雲の三男。光太郎の弟。豊周は1964（昭和39）年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている。光太郎、豊周を含め8人の姉弟（男4、女4）がいた。

注4 彫刻家。仏師・高村東雲の徒弟。元は中島姓であったが、後に東雲の姉の養子となり、高村姓となる。代表作には、皇居前広場の「楠公馬上像」、上野の「西郷隆盛像」、1893（明治26）年のシカゴ万博に出品した「老猿」（現在は国の重要文化財に指定されている）などがある。

注5 光太郎の「回想録」（「美術」昭和20年2月）によると、「埼玉県、菅原の神官の娘」となっている。

注6 1906（明治39）年3月から1909（明治42）年6月までのおよそ3年3か月間ニューヨーク、ロンドン、パリに留学している。

注7 高村の芸術における根本理念を表す言葉。